

150人規模の講義におけるグループワークの導入事例紹介

第2回 FD研修会
教育改善事例研修2

(日時:2011/11/2(水) 17:15-17:45

場所:222教室)

1. グループワーク

- 小宮山の定義
- 複数人数で、一つの作業を行うことによって、お互いに気づきあうこと
- 高木先生の事例
- 卒業論文 ペアワーク 学生同士お互いに校正。
- 小宮山が校正：教育効果低い
- いくらでも教員が直してくれるから。
- 学生が指摘しあう。お互いに刺激に。
- 教育効果高い。

なんでも鑑定団

- テレビ東京の番組
- 本人も価値がないと持っているモノ
- 高額(逆のことも)
- ペアワーク
- 誤字脱字に鋭敏・論理的矛盾に気がつくなど
- 学生：当たり前だと思っている
- ←周りに驚かれて、価値に気がつく
- 授業科目「キャリア開発」の講師である就職・採用アナリストの齊藤幸恵先生の受け売りです！

就職委員において

- 6年ぐらい前まで
- グループワーク ゼミなど少人数のときの方法
- 斎藤先生 200人規模で実施
- **効果的**
- 寝ている学生がいない！
- 私の講義とは大違い！
- 学生が楽しそうに、「考えて」いる。
- これはマネしよう！

2.方法

- 2年後期行動科学 150人規模
- グループ決めランダムに
- 教室の壁に0～9の数字
- 携帯番号の末尾など(毎回変える)
- それぞれの数字のところに集まり
- 3～5名のグループを形成してもらう。

手順

- ① まず、自己紹介。
- ② 用紙にメンバーの名前を書く。
- ③ 1枚目の用紙のウラを使用します。次回は2枚目のオモテ、次々回は2枚目のウラ...
- ④ 「お題」についてお互いに意見を交換(8分)
- ⑤ レポートは個人個人で書く。他の方の意見を紹介(名前を出してください。とっても重要です)しながら、自分の考えを展開(10分)
- ⑥ 今日は、1題のみ
(通常、2~3題。そのときは「何行で課題1をレポート」など指示します)

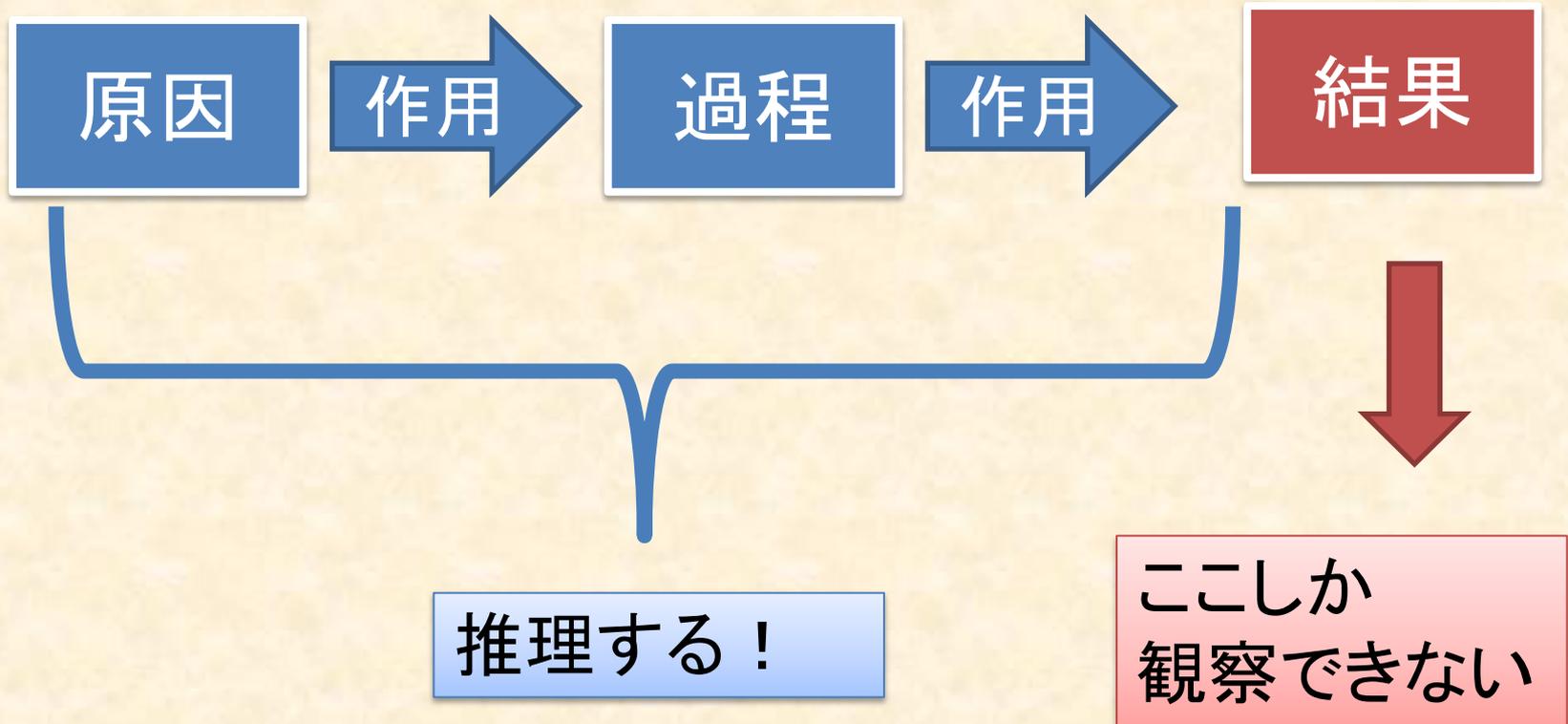
3.具体例

人々の行動の原因の探り方

- 社会でよく使われている**科学**の考え方
- 警察:科学捜査 病気を特定する
- どうしたら原因を特定して、問題解決できるか。
- 17世紀、ニュートンの科学革命以来のサイエンスの考え方 (仮説演繹法)

- 基本的な考え方を、推理モノのドラマを例に考えてみよう。
- 今日は、「**謎解きはディナーのあとで**」
- NST(フジテレビ) 火曜日 午後9時 10月25日放送
- #2 殺しのワインいかがでしょう？
- (小説版(東川篤哉著/小学館刊)と相違あり)

まずは **現場を観察**



現場の状況をメモしよう

- 被害者が死んだ原因は？ どうしたら犯行現場と同じ状況をつくれるか
- 周りの証言は？
- ビデオを見ながら、各自メモ
- グループワークで、確認！
- グループワーク 2つあるうちの1つ
- メモはノートにとって、グループワーク用紙には話しあった結果をまとめよう。
- もし1枚で足りなかったら2枚目に（一言書いてください。次ページに続くなど）

現場の状況から



どうしたら犯行現場と同じ状況をつくれるかを考えよう！

よい探偵
細かい観察
可能性を絞れる

グループワーク2

- 今、ビデオで示された状況の中で
- 犯行現場と同じ状況をつくる方法を考えよう！
- いま見せた範囲の条件ならば、テレビとは違う方法による犯行の可能性あり！
- テレビの結末を知っている人はぜひ「違う犯行の方法」を考えよう！

4.効果

- 他者の意見を聞くことで考えが深まる
- 一人だとありきたりな答えで考えることをやめてしまいがち
- メンバーの異なる意見→考え続ける
- +複眼的視点
- 聞き逃し・質問対応
- 聞き逃して、分からないところ
- 学生：そこから先考えられない
- グループワークを挟むことで、グループのメンバーに内容を確認